

第 18 回手話通訳技能認定試験（手話通訳士試験）実技試験

聞取り通訳試験（問題）

第1問 テーマ「新しい医療の受け方」

今、医療の世界で、直訳すれば「第二の意見」という意味の言葉が使われるようになっていきます。病院で治療を受けている者が、現在の診断や治療について、主治医以外の医師の意見を聞く「セカンド・オピニオン」です。

「セカンド・オピニオン」を聞くためには、原則として、「紹介状」と検査のデータが必要になります。「セカンド・オピニオン」は、これらの資料に基づいて、診断や治療についての意見を提供するもので、新たな検査や治療は行いません。

もともと、アメリカで始まり、日本においても、徐々に広がってきています。しかし、まだ普及していないために、患者は、「主治医に失礼になるのでは」と思いがちのようです。

一方、がんや心臓病のように、治療方法が日進月歩している領域では、その必要性はより高まっています。

また、診療情報を請求する場合、平成 18 年 4 月から 3 割負担の患者の場合は 1,500 円で請求できるようになりました。

患者が納得して治療を受けるためにも、積極的に利用されるようになることが望ましいのです。

第2問 テーマ「夢をかなえたイチロー」

人は誰も夢を持ちます。夢を持ち、それを実現させるべく燃えることができるのは人間だけです。

大リーグのイチローの人生も、幼いときに夢を持ったときから始まったのです。

人はイチローを「天才」といいます。確かにその資質は類まれなるものでしょう。でも小学校 6 年のときの彼の作文を目にすると、資質だけではなく、それを上まわる努力と強じんな意志があったればこそ、今のイチローがあるのだということがうかがえます。

その作文は「僕の夢は一流のプロ野球選手になることです。」から始まっています。これだけだったらなんの変哲もない子どもの夢です。ところが、このあと、この作文はその夢を実現する上で何が大切かを如実に語っているのです。

そこには「僕は 3 歳のときから練習を始めています。3 年生のときから今では 365 日のうち 360 日は激しい練習をしています。だから、1 週間で友達と遊べる時間は 5、6 時間です。」となっています。

ここには、自分の夢に対していささかも迷うことなく、自らの夢に対して代償を払おうとする本気があふれています。

第 18 回手話通訳技能認定試験（手話通訳士試験）実技試験

読取り通訳試験（手話表現の要約）

第1問 テーマ「我が故郷」

私の家の後ろには山が連なり、前には田んぼが続き、その向こうには海が見えます。

水の話です。水については問題ありません。山の雪は溶けずに残り、真夏でも溶けきることはありません。

東京では、水不足や節水が必要とのニュースをよく耳にしますが、こちらでは心配いりません。

水を一日中流しても大丈夫です。山の雪が次第に溶けて、川となり、もう一方で、地下水となって流れていきます。地下水はどこの家でも利用され、いつでも飲むことができます。

冬の間、車を運転できないことがありますね。東京ではほんの少しの雪で、交通マヒや大混乱を起こしますが、こちらではそんなことは起こりません。地下水を汲み上げて道路に散水して雪を溶かしているので、車の運転は楽にできます。

ここは、とても空気もよいところでもあります。

第2問 テーマ「会社の事情」

4年前、5月の連休明けに、私はいつものように入社すると、みなが暗い顔をしてひそひそと話をしていました。私の机には、班長からのメモが置いてあり、11名のリストラが決まったと書いてありました。「名簿に私も入っているのか」と班長に聞くと、「そうだ」と言われ、大変ショックを受けました。

11名が会社の社長以下3名との交渉に臨むと、意外なことに会社側には弁護士も加わっており、話し合いが始まりました。交渉は数回重ねました。20%から30%の給与カットや、ボーナスはゼロなど、われわれの提案は頑なに退けられ、やむなく退職が決まりました。大変落胆しましたが、みなで今後のことや、仕事探しなどについて話をしました。

6月30日、入社最後の日の5時に、11名の仲間が集まり、「悲しまずに、元気を出してがんばろう」と互いに硬い握手をして、今後のことなど、いろいろ話をして、悲しかったですが、みな、別れていきました。